



独居高齢者の実態と生活満足度に関する調査研究

竹中, 優子 ; 朴木, 佳緒留 ; 岡田, 修一 ; 井上, 真理 ; 稲垣, 成哲 ; 川畑, 徹朗 ; 加藤, 佳子 ; 近藤, 徳彦 ; 城, 仁士 ; 長ヶ原, 誠 ; 平山, 洋介

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(2):139-147

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81006276>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006276>



独居高齢者の実態と生活満足度に関する調査研究

Research on Condition of Life and Life Satisfaction for Lonely Elderly

竹中優子*、朴木佳緒留**、岡田修一**、井上真理**、稲垣成哲**、川畑徹朗**、加藤佳子***、
近藤徳彦**、城仁士**、長ヶ原誠***、平山洋介**、増本康平***、松岡広路**、森岡正芳**

Yuko TAKENAKA*, Kaoru HONOKI**, Shuichi OKADAI**, Mari INOUE**, Shigenori INAGAKI**,
Tetsuro KAWABATA**, Yoshiko KATO***, Narihiro KONDO**, Hitishi JO**, Makoto CHOGAHARA**,
Yosuke HIRAYAMA**, Kohei MASUMOTO***, Kouji MATSUOKA** and Masayosi MORIOKA**

要約：本研究は神戸市灘区鶴甲地区に住む独居高齢者の生活の実態を把握し、彼らの生活満足度を規定する要因を探ることを目的にして行った。研究方法は住民を対象に質問紙調査を行った。鶴甲連合自治会、神戸市灘区役所まちづくり課および健康福祉課の協力のもと、全戸に質問紙を配布し、郵送にて記入済み質問紙を回収した。本研究では65歳以上の高齢者332名を分析の対象とした。独居高齢者の生活の実態の特徴を明らかにするため、同居者の有無によるクロス集計を行った。同時に、同居者の有無別に性別による差をクロス集計で明らかにした。分析に用いた項目は基本的属性のほか、主観的健康観、主観的年齢観、自由時間の自己認識、健康維持・増進を心がけた運動習慣のような生活習慣に関する項目、近所づきあいの志向、地域活動への参加状況、近隣交際量、友人の数や友達づきあいの満足度のような社会関係の項目である。さらにこれらの項目を独立変数として、生活満足度を規定する要因を重回帰分析で明らかにした。分析の結果、当地区に住む高齢者の生活には、同居者の有無による大きな差が見られなかった。また、生活満足度を規定する要因は、性別、世帯所得、主観的健康観、近所づきあいの満足度であった。

1. はじめに

本研究は、地域在住の一人暮らしの高齢者（以下、「独居高齢者」と称する）の生活の実態を把握するとともに、彼らの生活満足度を規定している要因を明らかにすることを目的としている。

少子高齢社会が著しく進行しているわが国においては、世帯形態も大きな変化を迎えている。かつては2世代以上の家族から構成される大家族が多く存在したが、経済の発展に伴い夫婦と未婚の子どもで構成される核家族が主流となり、現在では単身世帯の数が多くなってきている。2013年に厚生労働省から、2010年の総世帯数は5184万世帯であり、そのうち単身世帯が1978万世帯（32.4%）を占め、2035年には単身世帯の占める割合が37.2%になるという推計が出された。高齢者が暮らす世帯においても同様の傾向にある。世帯主が65歳以上の世帯数は2010年では1620万世帯であり、総世帯数の31.2%を占めている。そのうち単身世帯は498万世帯（30.7%）を占めている。これが2035年になれば2020万世帯となり、単身世帯は762万世帯（37.7%）にまで到達するという推計が発表された。この発表に対して、日本経済新聞（2013年6月14日）は「この数字は2010年の1.5倍

に相当するという発表がなされた。晩婚化や未婚の広がりを要因に、一人暮らし高齢者の世帯は762万世帯に増え、1980年代に全世帯の4割以上を占めていた「夫婦と子」の世帯は2035年には23.3%にまで減り、単身世帯の割合は2010年の32.4%から37.2%にまで高まると予測されている」と掲載している。

このような独居高齢者の増加はさまざまな社会問題を生み出している。たとえば、従来は家族によって担われていた軽度の介護も介護施設などの助けで支えることになり、それに伴って社会保障費が増大するという問題、閉じこもりやいわゆる「孤独死」の増加という問題があげられる。近年では「おひとりさまの老後」というようなタイトルで、独居高齢者の生活の問題点を解説したり、安心して生活ができるようなノウハウを紹介したりするような内容の出版物も増えてきている。前述の厚生労働省の発表を受けて、読売新聞（2013年6月14日）では「非正規雇用者が増大している現在においては、その人たちが高齢期を迎えたときに、年金受給額が低い水準にとどまる人が多いと見られ、貧困な一人暮らし高齢者がますます増えるのではないかと予測もされている。近年では、都心部における集合住宅での高齢者の孤立が問題視されるようになり、行政の福祉サービスや介護保険も使わず、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育研究補佐員

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2013年10月1日 受付)
(2013年11月1日 受理)

行政から『見えない』高齢者が多いことも報告されている。かつては孤立した高齢者といえば貧困層が連想されていたが、最近では持ち家の人も少なくなく、その人たちは、自分はまだ頑張れる、経済的にも余裕があるから大丈夫と思っている人が多く、そういった人ほど『寂しい』『困った』と声に出さず、危うい孤立状態に陥っても自覚できないと指摘されている。東京都港区で行われた調査では、単身者の17%が『緊急時の支援者』がおらず、このうち2割弱が東日本大震災時に誰とも主連絡を取り合っていなかったことが明らかにされた。その調査の中で『安否を誰に知らせたらよいかわからなかった。そして、知らせる必要がないことに気づいて愕然とした』というような回答が寄せられていた』という記事を掲載し、独居高齢者現状について新しい視点を紹介している。

高齢者が独居に至る過程はさまざまである。松本と東條(2001)は、「高齢者が一人暮らしに至るには、配偶者など親族との死別や離別・別居、子どもの就職・結婚等の同居家族の事情、家の狭さや転居等の物理的な事情、一人で暮らしたいといった意識など、関連する要因は多数挙げられている」と述べている。また、下開(2005)は、「たとえ自発的な選択による結果であるにせよ、一人暮らしの高齢者は、家族や子どもと離れて暮らしているという意味で社会的に孤立しやすい状況にあることは事実である」と指摘している。このような現象は都市部に限ったことではなく、すべての地域に共通して生じうる現象であり、今後、地域で生活する高齢者をどのようにして支えていくかということがひとつの大きな論点となってきている。

2. 調査の対象者と方法

本研究の調査対象地区は神戸市灘区鶴甲地区である。当該地区は、神戸市の山の手に広がる住宅地区であり、昭和40年代前半に建てられた住宅団地(中層階段式5階建て37棟)が含まれている。神戸市がホームページ上で発表している統計調査によると、当該地区は高齢化率が31%を超えており、これは、灘区の中で2番目に高い数字となっている。

具体的な調査の方法は次の手順で行った。作成した質問紙は鶴甲連合自治会、神戸市灘区役所まちづくり課および保健福祉課の協力のもと、団地の各号棟や宅地グループの理事会の代表者によって各世帯に配布された。記入済みの質問紙は郵送にて返却を求めた。調査期間は平成24年6月20日から7月31日である。配布部数は2000部であり、返却された質問紙は801部であった(有効回答率40.1%)。本研究では、その中から65歳以上の高齢者332名を分析の対象とした。

調査項目は以下の表1のとおりである。

【表1 調査項目】

個人的属性の項目	性別、年齢、婚姻状態、一番近い別居子との距離、世帯の年間総所得、職業、健康自己評価、年齢自己認識
生活習慣の項目	自由時間量の自己認識、自由時間を過ごす相手、健康の維持・増進のための運動習慣
社会関係の項目	ボランティア・社会活動への参加、地域活動・行事への参加、近所づきあいの志向、近隣住民との交際量
満足度に関する項目	現在の健康状態、生活全般、友達の数、友人づきあい、近所づきあい、交通の便、買い物の便、医療事情

近隣交際量については、「顔を合わせれば挨拶をする」、「立ち話をする」、「家の行き来をする」、「個人的な悩みを相談する」という問柄の近隣住民の数の実数を回答してもらった。

分析の方法は以下のとおりである。同居者の有無による生活の実態の違いを明らかにするためクロス集計を行った。さらには男女別の違いを明らかにするため、同居者の有無ごとにそれぞれ性別によるクロス集計を行い、有意差はカイ二乗検定によって求めた。各満足度に関する項目においては、回答を「満足している」「満足していない」の2件に集約し分析を行った。

生活満足度を規定する要因については、松岡(1996)の研究を参考に、性別、職業、収入、健康満足度、近隣交際量、地域活動への参加の変数を独立変数とした重回帰分析により明らかにした。

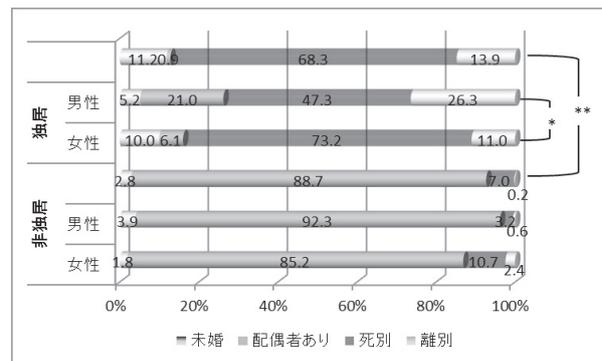
3. 調査結果

回答者は男性が175名、女性259名であり、そのうち独居者は男性は20名(高齢者全体の11.4%)、女性は85名(同32.8%)であった。独居高齢者のうち75歳未満の前期高齢者は43名(男性6名、女性37名)、後期高齢者は62名(男性14名、女性48名)であった。独居高齢者のうち戸建て住宅に住む人が20名(20%)集合住宅に住む人が80名(76.2%)、無回答が5名であった。

1) 独居高齢者の生活の実態

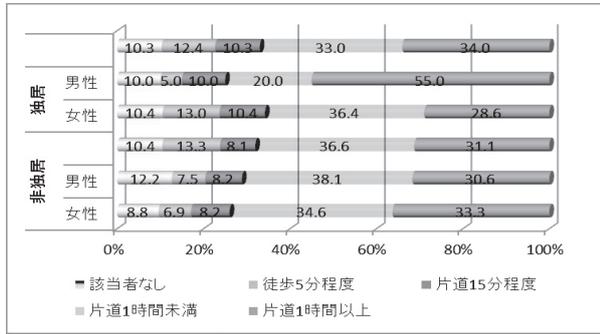
①属性の分布

基本的属性の項目における独居者と同居者がいる高齢者の違いを整理すると以下のようになる。



【図1】婚姻状態

現在の婚姻状態においては、同居者の有無によって有意な差が見られた。また独居高齢者においては性別による有意な差が見られた。特に独居の女性の中で死別者が多く、独居に至る大きな要因となっていると考えられる(図1)。



【図2 別居子との距離】

別居している子どもとの距離については、同居者の有無によって有意な差は見られなかった。また、同居者の有無にかかわらず、性別による有意な差も見られなかった。全体的にみて、片道15分程度未満の近距離に住んでいる子どもがいる人が少なかった(図2)。

【表2 年間世帯所得】

	同居			非同居		
	男性	女性		男性	女性	
200万未満	41.7	15.0	48.2	12.9	12.0	13.3
200~499万	51.5	80.0	44.6	66.0	65.3	66.7
500~799万	4.9	0.0	6.0	13.5	13.3	13.9
800~999万	1.0	5.0	1.2	2.5	4.0	1.2
1000~1499万	1.0	0.0	1.2	2.8	3.3	2.4
1500万以上	0.0	0.0	0.0	2.2	2.0	2.4

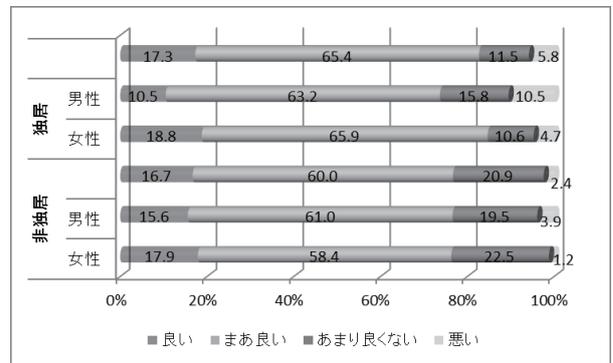
世帯における年間の総所得では同居者の有無によって有意な差が見られた。また独居者においては性別によって差が見られた。この地区に住む独居女性高齢者には低収入者が多い傾向が明らかになり、これは先行研究で指摘されてきた内容や全国的な水準と同じ結果になった(表2)。

職業に関しては、同居者の有無によって有意な差は見られなかった。しかし、同居者の有無にかかわらず、性別による有意な差が見られた。この結果も、先行研究で明らかにされてきた独居者の特徴と一致した結果となった(表3)。

【表3 職業】

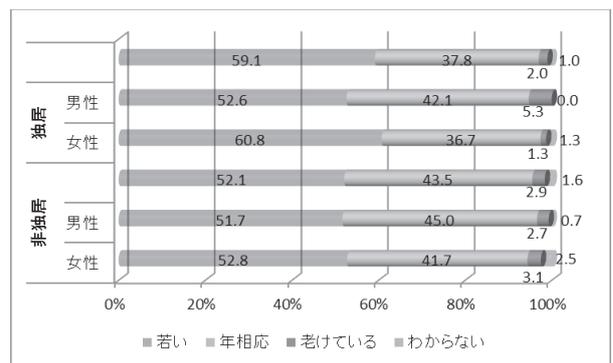
	同居		非同居	
	男性	女性	男性	女性
会社員	1.9	10.0	0.0	0.9
会社役員	2.9	5.0	2.4	1.8
自営業	4.8	15.0	2.4	5.8
パート・アルバイト	3.8	0.0	4.8	4.0
契約・嘱託・派遣	0.1	0.0	1.2	1.2
自由業	0.1	5.0	0.0	1.2
主婦	28.8	0.0	35.7	29.2
その他	2.9	5.0	1.2	1.5
無職	52.9	60.0	51.2	54.1

** p<0.01



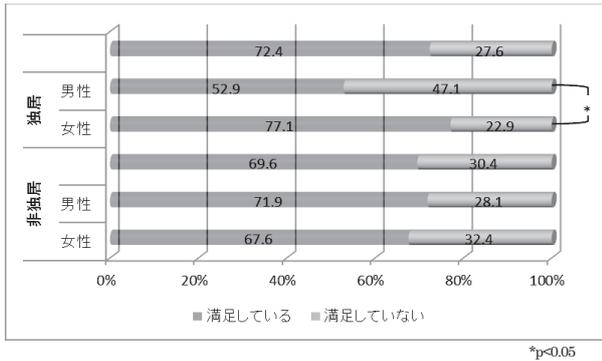
【図3 主観的健康観】

主観的健康観については、同居者の有無による有意な差は見られなかった。また、同居者の有無にかかわらず、性別間で有意な差は見られなかった。全体的に自分の健康状態を「良い」と考えている人が多かった。これは、全国的な調査や先行研究の結果に比べてかなり大きな数字であった(図3)。



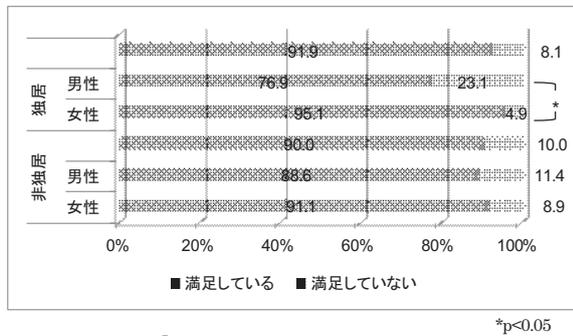
【図4 主観的年齢観】

主観的年齢観においても同居者の有無における有意な差は見られなかった。また、同居者の有無にかかわらず、性別間で有意な差は見られなかった。全体的に自分の年齢よりも若いと考えている人が多かった(図4)。



【図5 健康の満足度】

現在の健康の満足度に関しても同居者の有無による有意な差は見られなかった。しかし、独居者においては性別間で有意な差が見られた。同居者のいる高齢者の中では性別の差は見られなかった。独居男性高齢者では現在の健康状態に満足していない人が傾向があることが明らかになった（図5）。



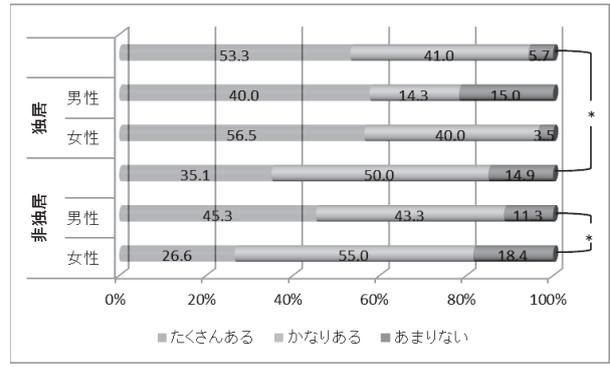
【図6 生活満足度】

生活満足度に関しても居者の有無による有意な差は見られなかった。しかし、独居者においては性別間で有意な差が見られた。同居者のいる高齢者には性別による差は見られなかった。男性独居高齢者は女性独居高齢者や同居者がいる高齢者に比べて現在の生活全般に満足していない傾向が明らかになった（図6）。

②生活習慣

生活習慣に関する項目については以下のようなことが明らかになった。

自由時間がどのくらいあると感じているかという質問においては、同居者の有無によって有意な差が見られた。独居者の中では性別による有意な差は見られていないが、非独居者においては性別による有意な差も見られた。同居者がいる人女性が一番自由時間がなくて感じていることが明らかになった。これには、家事役割の分担がかかっていると考えられる（図7）。



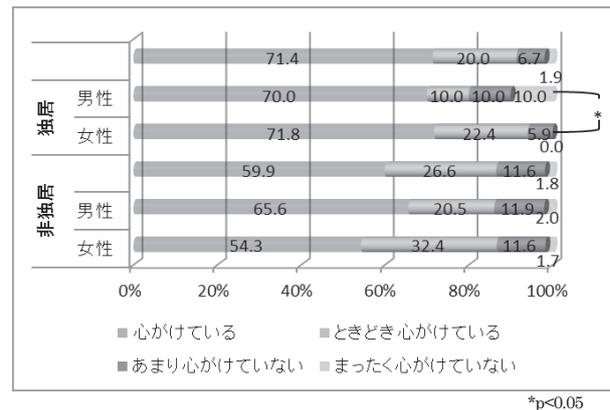
【図7 自由時間の自己認識】

【表4 自由時間を過ごす相手】

	独居			非独居		
	男性	女性		男性	女性	
一人で	64.7	80.0	63.4	33.8	37.3	31.4
配偶者	2.0	5.0	1.2	44.3	52.3	37.3
子ども	2.9	0.0	3.7	6.2	2.7	9.4
孫	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.6
友人・知人	27.4	15.0	30.5	11.7	5.9	16.6
その他	1.0	0.0	1.2	3.4	2.0	4.8

**p<0.01, *p<0.05

自由時間を一緒に過ごす相手には同居者の有無によって違いが見られた。独居高齢者においては性別による差は見られなかったが、同居者がいる高齢者には性別による差も見られた。同居者がいる高齢者には家族と過ごす人が多く、独居高齢者は友人と一緒に過ごすという人が多かった。また、同居者がいる男性高齢者は配偶者と一緒に過ごすという人が多かったが、同郷者がいる女性高齢者は友人や知人と過ごすという人も多かった（表4）。

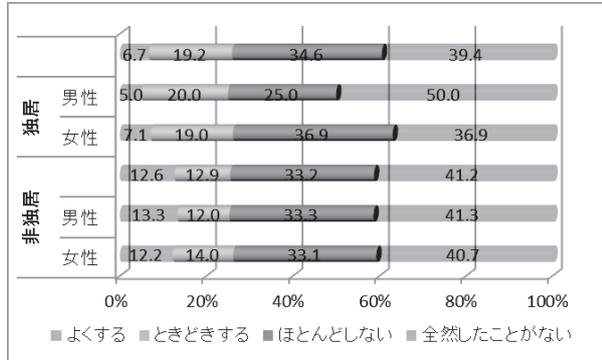


【図8 健康維持・増進のための運動】

健康の維持・増進のための運動習慣に関しては、同居者の有無によって有意な差は見られなかった。独居高齢者においては性別による有意な差が見られたが、同居者のいる高齢者には性別による差は見られなかった。男性独居高齢者の中では健康の維持や増進を目的とした運動を心がけていない人が多い傾向が明らかになった（図8）。

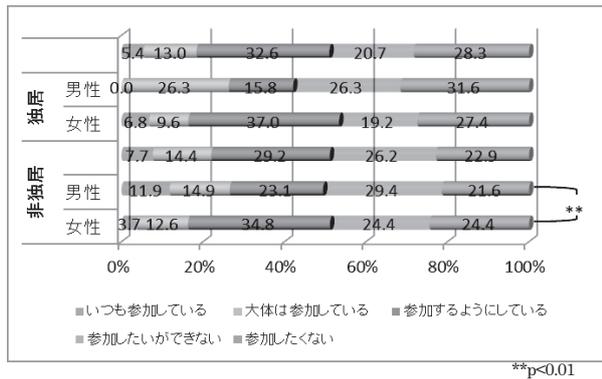
③社会活動

地域活動への参加や近隣交際量などの社会活動に関する質問項目においては以下のようなことが明らかとなった。



【図9 ボランティア・社会奉仕活動の経験】

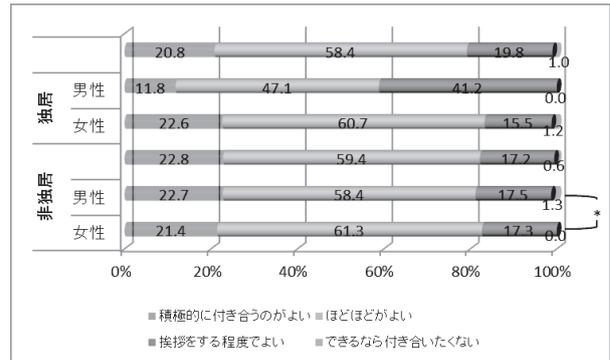
ボランティア・社会奉仕活動の経験については、同居者の有無による差は見られなかった。また、同居者の有無にかかわらず性別による差も見られなかった。全体的に、ボランティア活動に「参加したことがない」という高齢者が多かった(図9)。



【図10 地域活動・行事への参加】

町内会や自治会をはじめとする地域活動や地域行事への参加状況については、同居者の有無による有意な差は見られなかった。しかし、同居者がいる高齢者においては性別による有意な差が見られた。独居高齢者の中では性別による差は見られなかった。全体的に、女性よりも男性のほうが積極的に地域参加をしている人が多く、中でも同居者がいる男性のなかで参加している人が最も多かった。一方で、「参加したいができない」という人も同居者がいる男性が一番多く、同居者がいる男性の地域活動への参加は二極化傾向にあることが明らかになった(図10)。

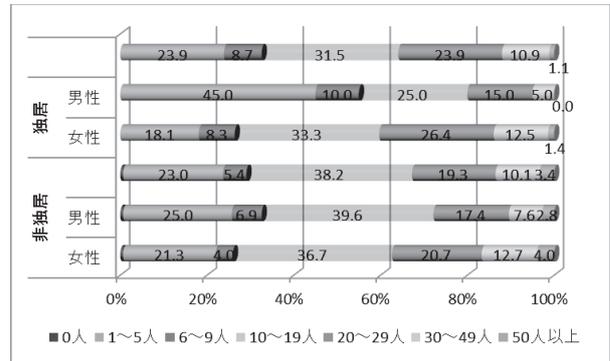
近所づきあいの志向に関しては同居者の有無による有意な差は見られなかった。しかし、同居者がいる高齢者においては性別による差が見られた。独居高齢者の中には性別による差は見られなかった。同居者がいる男性高齢者は「近所づきあいを避けたい」という傾向があることが明らかになった(図11)。



【図11 近所づきあいの志向】

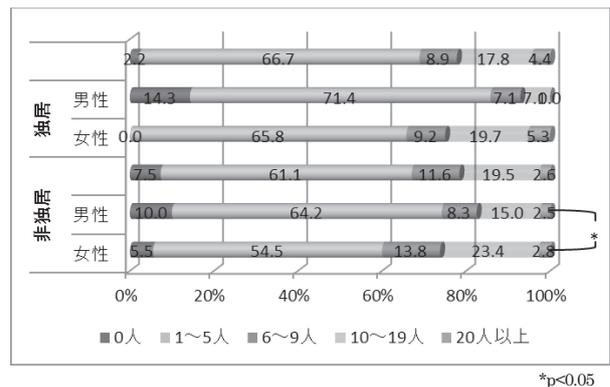
*p<0.05

近隣交際量については以下のような傾向が見られた。



【図12 顔をあわせたらあいさつをする人】

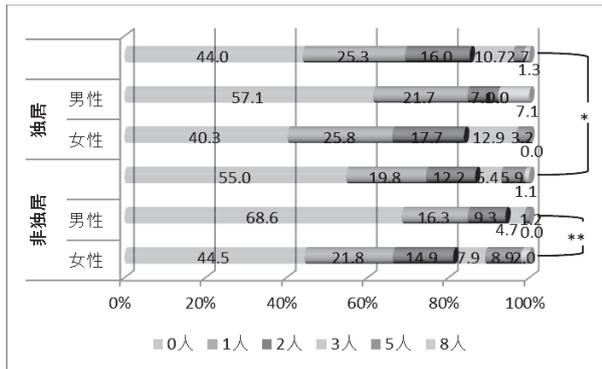
顔を合わせたらいさつをする間柄の人の数においては、同居者の有無による差は見られなかった。また、同居者の有無にかかわらず、性別による差も見られなかった(図12)。



【図13 会えば立ち話をする人】

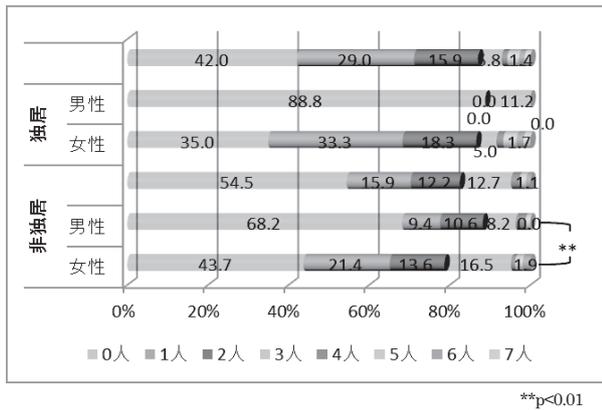
*p<0.05

会えば立ち話をする間柄の人の数においては同居者の有無による差は見られなかった。しかし、同居者がいる高齢者においては性別による有意な差が見られた。独居高齢者の中では性別による差は見られなかった。全体的には女性より男性のほうが立ち話をするような間柄の近隣住民がいる人が多く、同居者がいる男性高齢者には地域の中で立ち話をするような間柄の人がいないという傾向が見られた(図13)。



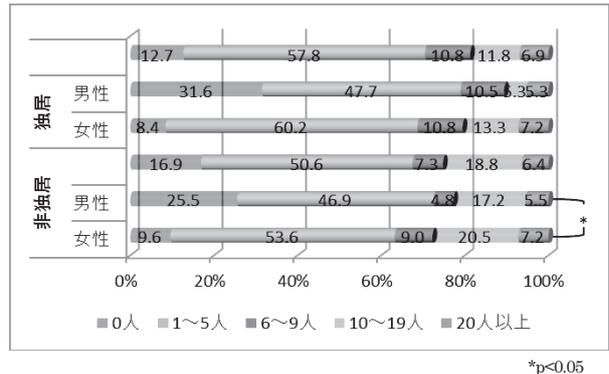
【図14 家を行き来する人】

家を行き来するような間柄の人の数は同居者の有無によって有意な差があった。独居高齢者には性別による差は見られないが、同居者がいる高齢者においては性別による有意な差が見られた。同居者がいる高齢者に比べて独居高齢者はお互いの家を行き来するような間柄の近隣住民がいる傾向が高く、全体的に男性のほうがそのような間柄の人がいる傾向が低い、特に同居者がいる男性においてはそのような間柄の人がいる傾向が低いことが明らかになった(図14)。



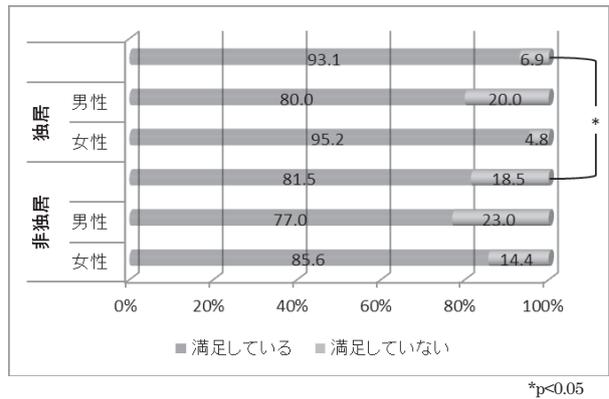
【図15 個人的な悩みを相談する人】

個人的な悩みを相談する間柄の人の数は同居者の有無によって有意な差は見られなかった。独居高齢者の間では有意な差はなかったが、同居者がいる高齢者においては性別による差が見られた。全体的には女性のほうが個人的な悩みを相談するような間柄の近隣住民がいるが、とくに、同居者のいる男性においては、地域の中でそのような間柄の人がいない傾向があることが明らかになった(図15)。



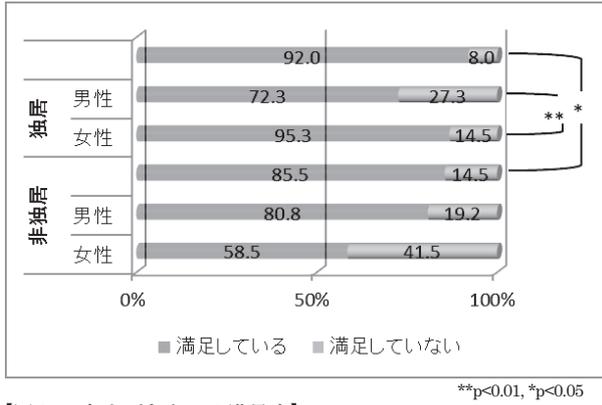
【図16 3日間に話した人の数】

記入時前の3日間に家族やお店の人以外に家庭外で話した人の数は同居者の有無による有意な差は見られなかった。独居高齢者においては男女間に差は見られなかったが、同居者がいる高齢者においては性別による差が見られた(図16)。全体的に地域内で過去3日間に話をした人の人数は女性のほうが多いが、特に同居者がいる場合にその傾向が高かった。同居者がいる場合、男性は家族内で会話をすることが多いと推測される。この傾向は、2009年に内閣府によって行われた「高齢者の生活実態に関する調査」の結果よりもかなり小さな数字となった。その意味では、地域の中で孤立している人は少ないと考えられる。



【図17 友人の数の満足度】

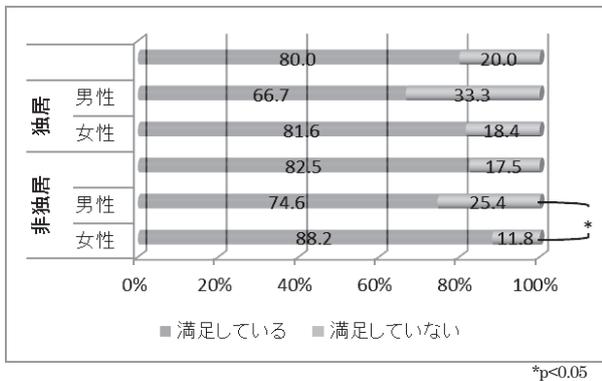
友人の数の満足度は同居者の有無によって有意な差が見られた。しかし、同居者の有無にかかわらず、性別による差は見られなかった。同居者がいる高齢者の場合に比べ、独居高齢者のほうが友人の数に満足している傾向が明らかになった(図17)。



【図 18 友人づきあいの満足度】

友達づきあいの満足度は同居者の有無によって有意な差が見られた。同居者のいる高齢者においては有意な差は見られなかったが、独居高齢者においては性別による有意な差が見られた。同居者がいる場合よりは一人暮らしの人のほうが友達づきあいに満足している人が多い傾向があり、女性独居高齢者の間では満足感が高い傾向が明らかになった (図 18)。

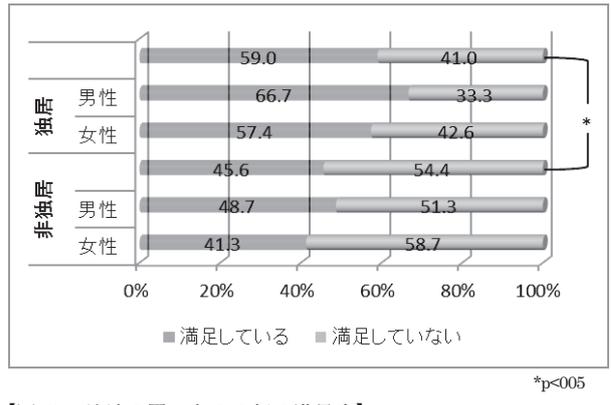
近所づきあいの満足度は同居者の有無によって有意な差は見られなかった。独居者の間では性別による有意な差は見られなかったが、非独居者において男女の間に有意な差が見られた。全体的には男性よりも女性のほうが近所づきあいに満足している人が多いが、同居者がいる場合特にその傾向があることが明らかになった (図 19)。



【図 19 近所づきあいの満足度】

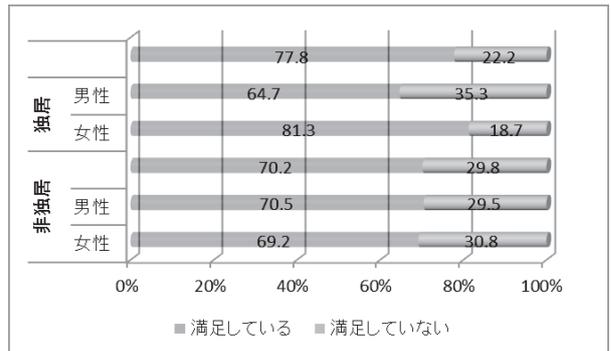
④地域の物理的環境に対する満足度

地域における住環境も重要な生活満足度の要因となる。特に高齢者においては、買い物や通院など日常生活の中での移動の問題が課題としてあげられている。交通手段については、中山間地など、公共交通機関が少ない地域の課題として考えられることが多いが、都心部においても中心商業地の衰退や、郊外型大型店舗の進出により住宅地に近い小規模商店が閉店してしまうことにより、買い物困難な状況が生まれているようである (ニッセイ基礎研究所)。本調査では、住んでいる地域での買い物の便、交通の便、医療事情について満足度を調べた。

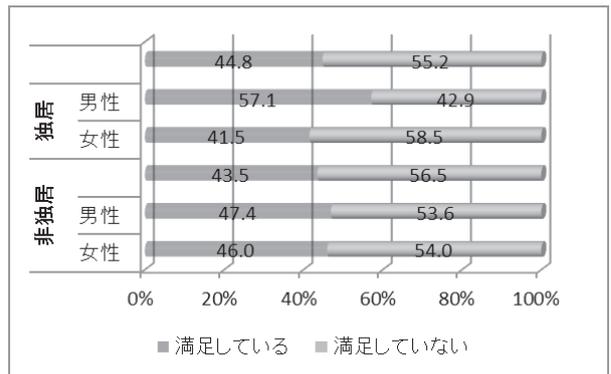


【図 20 地域の買いものの便の満足度】

地域の買い物の便に関しては同居者の有無によって有意な差は見られた。しかし、同居者の有無にかかわらず、性別による差は見られなかった。一人暮らしの高齢者よりも同居者がいる高齢者の中で地域における買い物が不便だと感じている人が多いという傾向が明らかになった。これには、一度の買い物のときの買い物量も大きく関与していると考えられる (図 20)。



【図 21 地域の交通の便の満足度】



【図 22 地域の医療事情】

地域における交通の便、地域の医療事情においては同居者の有無において有意な差は見られなかった。また、同居者の有無にかかわらず、性別による有意な差は見られなかった (図 21、図 22)。

なお、本研究では各項目において前期高齢者の独居高齢者と後期高齢者の独居高齢者による違いも検討したが、どの項目においてもこの間に有意な差は見られなかった。

2) 独居高齢者の生活満足度を規定する要因分析

対象地区の独居高齢者の生活満足度に影響を与えている要因を調べるために、生活全般に対する満足度の項目を除く以上の全項目を独立変数としてステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。その結果、生活満足度に影響を及ぼしている要因は、性別、世帯所得、健康自己評価、近所づきあいの満足度となった。

【表5 独居高齢者の生活満足度に関する重回帰分析の結果】

独立変数		β	p
ステップ1	性別	0.24	0.03
ステップ2	性別	0.32	0.01
	年間総所得	0.28	0.01
ステップ3	性別	0.28	0.01
	年間総所得	0.25	0.02
	健康自己評価	0.39	0.00
ステップ4	性別	0.26	0.01
	年間総所得	0.26	0.01
	健康自己評価	0.37	0.00
	満足度:近所づきあい	0.28	0.00

4. 結果と考察

全体的に、当地区に暮らす高齢者の中では同居者の有無による差が見られるものが少なかった。また、松岡（2007）が「一人暮らしの高齢者が日常生活で心配なく生活していくためには、（中略）自分の近所に普段から自宅を行き来しているような親しい人がいるかどうかはきわめて重要である。しかし、一人暮らしの高齢男性の4人に1人が近所付き合いもなく、4割以上が親しい友人もいない状況である。（中略）一人暮らしの高齢者で地域活動やボランティア活動に参加していない人も、男性では6割、女性で5割以上という状況である」ということを明らかにしたことや、室崎ら（2008）が「高齢者の近所づきあいについて、『あいさつ』は9割、近所での立ち話、おすそ分けは5～6割と多くの高齢者が行っている。一人暮らし世帯では、『町内行事参加』を『積極的にする』割合は15.3%で他の2累計（夫婦のみ、その他）より7%程度低く、『おすそわけ』を『する』までの割合は61.2%で10%程度低くなっている。また、近所での立ち話は『積極的にする』が21.2%で他の2累計よりも7%程度高いが『しない』も10%程度高く、立ち話をするものとしないものに二極化している。近所づきあいに関しては家族3累計による顕著な違いは少ない。一人暮らし世帯は、外出時に出会う近所の人と立ち話や近所の家でのおしゃべりを積極的にする人の割合が他の2累計よりも高く、近隣での交流の比重が高いグループが存在している。一人暮らし世帯になると、町内行事の参加やおすそ分けの付き合いは減少することを明らかにしているが、当地区に住む独居高齢者は、これらの結果と一致している傾向は見られているが、数値上ではこれらの結果よりも「良い状態である」といえた。

室崎ら（2008）は、「一人暮らし世帯が近隣の物的環境や近所での立ち話や家出のおしゃべりへの依拠が強く、これらの充実・支援をもっとも必要としていることが明らかになった。また一人暮らし世帯は、活動領域が他の家族類型に比べると自宅の周辺にとどまる傾向が見られた。これは活動領域が縮小しても、その範囲内で日常生活が成立しえる環境が存在しているということである。近隣に日常生活に必要な施設や外出目的となる場所が存在し、高齢者が地域居住をする中で外出を誘発できる環境が存在していることが重要と考えられる」と述べている。この文脈に倣えば、当地区に住む高齢者においては、同居者の有無にかかわらず、高齢者にとって住みやすい環境が整いつつあると言えるのかもしれない。この地区に住む人は自分が健康であると考えている人が多く、健康を心がけた運動を行っている人も多いことから、自らこのような場所を見つけ出し、自分自身が暮らしやすいような環境を作り出そうとしている人が多いのかもしれない。

さらに、本調査を行う中で、この地区に住む人の中には地域における教育や教養の機会、趣味や娯楽の機会を求めている人が多いということも明らかになっている。このことから、この地区に住む高齢者にとっては人的サポート環境の整備とともに自己向上や人的交流などのいわば「機会」拡大の状況整備を整えることが求められていると言える。

本研究において残された課題も多い。当該地区に住む総高齢者数（1648名）を母集団とみなせば有効回答率は20.1%であり、当該地区に暮らす高齢者の全体像を明らかにしたとは言い難い。本研究で用いた質問紙の質問量がとても多く、それを見て気後れた人、途中で回答をあきらめた高齢者も多かったと推測される。その意味では、「質問紙に最後まで回答できた元気な高齢者」の生活実態を明らかにしたということもできよう。高齢者のより正確な生活実態を明らかにするにはなお一層工夫をすることが求められる。

また、本研究では独居高齢者の生活満足度を規定する要因のみに注目して分析を行った。しかし、主観的健康観をはじめとする他の社会老年学的指標を規定する要因を明らかにすることが、地域で暮らす高齢者の生活実態をより正確に把握するために必要であると考えられる。これらの関連性については今後検討していくべき課題である。

【本研究は、科学研究費補助金（基盤A「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」課題番号24240093 代表者 朴木佳緒留）の助成を受け実施したものである。】

【参考・引用文献】

- 株式会社ニッセイ基礎研究所（2012）「一人暮らし高齢者・高齢者のみ世帯の生活課題とその支援方策に関する調査研究報告書」
- 小谷 みどり（2012）「ひとりで暮らす高齢者の問題—孤独の不安—」『第一生命 Life Design REPORT』winter 16-23.
- 松岡英子（1996）「独居高齢者の幸福感とその関連要因」、『信州大学教育学部紀要』No.99, 99-109

- 松岡 勇 (2007) 「一人暮らしの高齢者には遠い親戚より「近くの他人」」『第一生命 Life Design REPORT』 5-6月号、42.
- みずほ情報総研株式会社 (2012) 「一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活課題とその支援方策に関する調査研究事業報告書」
- 室崎千恵、重村 力、山崎義人 (2008) 「一人暮らし高齢者の居住継続を支える近隣環境に関する研究－京都市都心部の旧富小学校校区を事例として－」『日本建築学会計画系論文集』第73巻631号, 1907-1914.
- 日本経済新聞 2013年6月14日
- 下開千春 (2005) 「高齢単身者の孤独の要因と対処資源」『第一生命 Life Design REPORT』9月号 4-15.
- 読売新聞 2013年6月14日